

バーン＝ジョーンズ：ラファエル前派と修業時代

Burne-Jones: Pre-Raphaelite apprenticeship

デザイン学科

白石 和也

Kazuya SHIRAIISHI

イギリスにおける壁画に関しては、1834年に国会議事堂が焼失して以来、世界的に感銘を与える建造物を造る機会が生まれ、様式論争でゴシック主義者たちが勝利してその議事堂が後期垂直式の様式で建てられた。間もなくして国民の誇りである建物にふさわしい装飾を求める声が上がった。1842年4月にその装飾にあたる画家を公募することになり、それに応募したなかに G. F. ワッツ、ウィリアム・ダイス、フォード・マドックス・ブラウン他多数がいた。その翌年5月に参加作品の全140点がウェストミンスター・ホールで展示され、それらを見たロセッティはマドックス・ブラウンの応募作品に感銘を受けて、彼を捜し出して短期間だが弟子になったこともあった。ダイスは1847年に議事堂内の女王のロービング・ルーム（着替の間）を装飾するフレスコ画を依頼され、『アーサー王の死』に取材した5点を描いたのが歎待された。そのことが影響したのか同じ主題がオックスフォード・ユニオン（学生会館）のフレスコ画の源泉にもなったと考えられる。しかし主題の取り扱い方は非常に異なっていた。ダイスのは構図も形式的でアカデミックだったが、ロセッティと仲間たちのは神秘性と官能性が表わされたのである。

ロセッティはある日バーン＝ジョーンズをロンドンのケンジントン地区メルベル通りのプリンセプ一家のリトル・ホランド・ハウスへ連れて行った。そのサラ夫人は社交界の多様な人物や博識の

友人たち、一テニス、ジョージ・ハワード、コウツ・リンジー、トム・ヒューズその他の多くをもてなすことが多かったし、ロセッティやラスキン、ホルマン・ハントもそこを頻繁に訪れていた。バーン＝ジョーンズが7月の日曜日に家に書いた手紙によると「ロセッティと一緒にいくと多くの度胆を抜かれるような人たちに紹介されるのですが、いつも彼の傍らに着かせていただけるようです」⁽¹⁾。この最初の訪問をロセッティがどのようにお膳立てし、プリンセプ夫妻と一緒に住んでいたワッツとバーン＝ジョーンズを会せたかをかなり後になって彼が思い出している。

ソビイ・プリンセプ夫妻は芸術家ワッツをイタリアで面倒を見たことがあり、その彼はイギリスへ帰国後に再び縁あって夫妻のところに住むことになった。ワッツには国民的な壁画の画派があるべきだという願望があったようで、その意味ではロセッティのオックスフォードの装飾計画はゴシック復興の流れの中にも位置付けられよう。しかしその計画を実行するにあたり、ロセッティに疑念を抱き、フレスコ画の経験者が誰もいないことを知ったマドックス・ブラウンやホルマン・ハント、ウィリアム・ベル・スコットたちはその計画への参加協力を断った。

「ある日ゲイブリエル（ロセッティ）が金を持っている時のこと、ハンソム（二輪の辻場車）で日没になるまでドライブして回り、突然ロセッティは君もこれらの人々と知り合になるべきだ、と

言いだした。彼らは著名人ばかりで、そこには神や天地創造に関する変わった絵を描く画家がいるんで、会えるだろう」⁽²⁾と言った。バーン＝ジョーンズがリトル・ホランド・ハウスへやって来たときのことをプリンセプも憶えていて「今度はロセッティに一色白でグレイ・ブルーの目と幅広い額にちらつきがちな真っ直ぐな髪をした穏やかで一恥かしがりやの若者がついて来たが、最近の大変な天才だとロセッティが断言した。彼はあまり頻繁に話さないが、きわめて熱心な話し方で・・・苦しいほど内気であった。私の父の家に最初に来たさいは・・・私の頭はロセッティでいっぱいだったので、たいして印象がなかった。それがバーン＝ジョーンズ、すなわちロセッティや皆がネッド・ジョーンズと呼んでいる彼だったのである」⁽³⁾と述べている。プリンセプ夫人の応接ぶりをバーン＝ジョーンズは決して忘れられず、不思議な世界と感ずるほど彼の世話や保護を夫妻がしてくれた。バーン＝ジョーンズはあまり頻繁に会わないうちに、すでに彼にとって夫人は「サラ叔母さん」でプリンセプ氏の父は「ソビイ叔父さん」になって、他の多くの人々と同じようにこの家の洗練された自由奔放さや幅広い文化的環境に感銘させられ、すっかり魅せられてしまった。

ロセッティはワッツが寄寓していたリトル・ホランド・ハウスへは頻繁に訪れていた。彼がある日「他の仲間数名と一緒にオックスフォードのユニオン（学生会館）を装飾する仕事に参加するように」プリンセプを説得しに来たさいのことだが、プリンセプは経験がないからと難色を示したのである。するとロセッティは「くだらん。私の知合にも絵を描いたことのない男がいて一名前はモリスというんだがねー彼はパネルの一枚を引き受けている。きっと彼はいい仕事をするだろうーだから君も来た方がよい」⁽⁴⁾と彼の考えを退けたという。ロセッティは技術はどのようでも、芸術家の心にヴィジョンさえあれば作品を制作できるという考えを持っていた。こうしてその計画は二か月で仕上がる予定で押し進められることになった。ユニオン当局は設計者のウッドワードの

助言を聞き入れて必要経費だけの500ポンドを前払いで出すことに応じ、画家たちは無報酬だがソーダー水を調達してもらうことになった。

その学生会館の壁画制作は8月の中頃になると、哄笑があたりをゆすり、ソーダ水の栓を勢いよく抜いて泡立つ音のなかで仕事が始ったが、ソーダー水は結局、彼らの浴びせ合いに多く使われることになった。主題はすべて『アーサー王の死』の場面で、ポレンは「湖の姫から剣のエクスカリバーをもらうアーサー王」、モリスは「トリストラム卿を妬むパロミデス」、プリンセプは「エタルド姫のもとを去るペレアス卿」、スタナップは「三人の貴婦人に会うガウエイン卿」、ロセッティは「罪ゆえに聖杯の礼拝堂への入室を妨げられるランスロット卿」、ヒューズは「アーサー、及び泣く王妃たち」、バーン＝ジョーンズは「湖の姫によって石の下に閉じ込められるマーリン」で、他の一点はロセッティが「ガラハッド、ポーズ、パーシヴァルの三卿が聖杯に糧を与えられたこと」であったが、ロセッティは完成できなかった。

画家たちには当時、6週間ほど一つまり夏休暇の終わりまで一あれば仕上がってくれるという希望があったが、次年の春まで続いた。最初はロセッティとバーン＝ジョーンズとモリスがクウィーンズ・カレッジの向側のハイ・ストリート87番地の快適な古い家に一緒に宿泊していたが、後に秋学期が始るとジョージ街の別の家に引越した。ヴァル・プリンセプが間もなくしたある晩にモリス、ロセッティ、バーン＝ジョーンズと共に過した。彼はこの時のことをこのように鮮明に描き出している。「私は言うまでもなく、その招待を受けたことを誇りにしていたので、その家に時間通りにきちんと行った。するとそこに深紫色のフロックコートを着たロセッティと、眼鏡をかけ、もじゃもじゃの黒髪でがっしりした短身の男がいて、私は暖かく歓迎された。ロセッティが大声で<トップ、ヴァル・プリンセプを紹介しよう>と言った。<やー、はじめまして>と眼鏡の男が頷きながら答え、それから間もなくして、扉が開き、それが半分も開かれない内にバーン＝ジョー

ンズが滑り込むように入ってきた。それまで鼻歌を歌いながらぼんやりしていたロセッティがくネッド、プリンセブは知っているね>と言った。この内気な人物は、はにかんで顔を赤く染ながら、真っ直ぐ前に進んできた。そしていかにも彼らしく、心のこもった言葉で私を迎えてくれた。

夕食が済むと、例によって鼻歌を歌っていたロセッティが食卓の席を立ち、ソファーに向い、腰を丸くしてくトップ、君のこしらえたやつを一つ読んでくれたまえ>と言った。<いや、ゲイブリエル。もう全部聞いただろ>。<いや、いいんだ。プリンセブは一度も聞いてないんだし、第一に滅法うまい詩なんだからな>。<そういうなら、よかろう>とモリスは、作品を手にとってうなりだした。後に処女詩集として出ることになる何編かを教会の詠唱するときのような調子で朗読したのである。その間も絶えず彼は自分の時計の鎖を神経質そうに小刻みにゆすぶっていた。そのさい私はまだ人生経験が浅かったが、心に受けた印象は極めて強烈なものであったから、40年過ぎた今日でも、その情景をありありと思い出せる。

ロセッティはソファーに座りながら、憂いを含んだ大きな目でモリスを見すえていた。その間にもモリスは食卓についたまま朗読をし、時計の鎖をいじりまわしていた。その脇でバーン＝ジョーンズは — そのような情景のペン画を描いていた。

彼女の頭上を飾る黄金、
それにカートルの裾が合さるところの黄金、
それに恋人を包むガードルの黄金、
ああ、何と美しいマルグリートよ。

という詩節がまだ頭のなかで鳴っている。他にこんな詩節もあった。

<左にまわれ、息子のロジャー>と父は言った。
<兜の隙から奴の目が見えたら、
左にまわり、頭狙って打ちかかれ>。
かくて神より勝利を賜わらん。

その時は脳がぐるぐる回る感じでマイター寮に戻った」⁽⁵⁾ のをプリンセブは思い出している。彼によるとその窓からの光を和らげるために白く塗ってあったが、白くなったガラスの一面に、主にウォンバット（袋熊）などの動物が描かれていた。「君はウォンバットを知ってるかい。愉快的な奴で — とても滑稽な小動物なんだ」とロセッティが言った。それを描いたのはバーン＝ジョーンズで、あらゆる視点や状況で描いたのを、ロセッティが称賛したが、彼は後に生きたウォンバットを飼ってチェイニイ・ウォークでの暮らしを楽しもうとしたという。

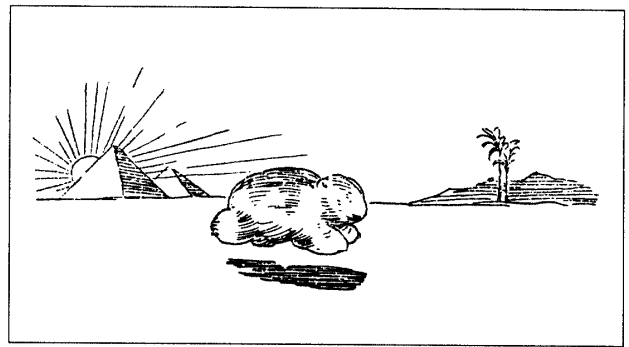


図1 オックスフォード・ユニオン窓の光を和らげるためにバーン＝ジョーンズが描いたと思われるウォンバット（袋熊）の一例。1957年。

彼らが後になって気付いた壁画の諸困難の一因は、絵を描く前に壁面の状態を整える作業を怠って、湿った漆喰の上に直接に描いたことにあるのが判明した。それに各々の壁は別々に二つの窓がくり貫かれていて、そのために下から眺めると、眩しくて窓の間の壁面に描かれた絵はどれもよく見えなかった。ウッドワードのこの建物はできたてで、モルタルも乾いておらず、煉瓦積みの荒壁も表面にのろを塗っただけであった。画家たちは無償で捧げるつもりであったが、制作が一週間また一週間と延びていくに従って、学生会館側が負担する彼らの宿泊費や材料費に関しての苦情が出てきた。しかしボウエンが財政係で、彼らの前に立ち上がって、ありとあらゆる不都合を削減してくれた。彼は — 礼儀正しく愉快的な人物で大学のなかでも常に例外的に見込みある人物と見なさ

れー 皆からとても愛され、ロセッティもただちに気に入った。

モリスはいつもの性急さで最初に絵に取りかかり、最初に描き終え、それから友人のディクソンの助けを借りて天井の梁に花模様と葉飾りを描く作業に入った。彼はそのような仕事は以前にしたことがないにもかかわらず、またその手本になる古代の作例もなく実に独創的でぴったり適合する下絵を一日で描きあげた。模倣というものが伝統への不公平で現在にとっても馬鹿げたことであり、発想の豊かさや希望だけを彼は確かに生涯よしとした。モリスはこのような装飾に非凡な才能を持っていたので、これが結局、彼らの請け負った仕事のなかで一番の出来であった。ユニヴァーシティ・カレッジの教員になっていたフォークナーも大学での仕事を終えて午後には手伝いに来て、常に素描の巧みな手際を示した。バーン＝ジョーンズが家族宛に書いた手紙によると「チャーリー（フォークナー）はあらゆる種類の奇妙な野獣や鳥を描いて天井をやたらと目立つようにしている」とある。他の一ウェブ、ソワン（ロセッティの友人）、クライスト教会のシンジョン・テイリットといった人たちもみな手伝い、彼らの名は垂木の一本に刻まれた。天井の目のつかない片隅には花や動物の代わりに、ホルバインの描いたヘンリ八世のポーズをとったモリスの肖像などを描いた。モリスはすでにこの頃から幾分か太り気味で恰幅がよかった。一日の仕事は8時に始まり、太陽が沈むまで続いた。「モデルが必要となれば、互いにモデルを務め合った。モリスの頭部はランスロットやトリストラムにうってつけだった」。事実、ロセッティは翌年に刊行されるモクスン版『テニスン詩集』の挿絵のためのランスロットのモデルとしてモリスを描いたし、また、学生会館に描いたロセッティの「ランスロットの見た聖杯の幻」のスケッチのなかではバーン＝ジョーンズがランスロットとして登場している。彼らの絵に甲冑が必要になっても、参考のできる実物がなく、モリスは中世に関する事柄をよく知っていたので、バシネット（鉄兜）とサーコート（外衣）を

デザインし、地元の鍛冶屋に行って、指示を与えて作らせたりもした。鎖かたびらが届いたときなどモリスは嬉しさのあまり、これを着てその晩の夕食の席についた。後にバーン＝ジョーンズがマッケイルに語ったところによると、それは下に置いたのを持ち上げるには確かに重かったが「一度身に着けると、重さが均等になって、私のこれまでの外套と着心地はさほどかわらなかった」という。

ロセッティは他の仕事にも迫られていたり、長いこと婚約しているリジー・シダルの病気のために二、三日はロンドンに戻ることもあり、あまり速くは進まなく、ついに彼女の重体の知らせを受けて仕事を中断してロンドンに戻ったので、彼の絵は未完のままになって、再びとりかかることはなかった。彼はまたもう二点の壁画「グウィネヴィアの私室で見つかったランスロット」と「聖杯の三人の騎士」の下絵も制作していたが、これはまだ描きはじめてもいなかった。後者の絵の水彩画を彼は数年後に描いているが、それは学生会館の壁画で使われた一小さな画筆で描かれた一手法と、それらの燦然と輝く緑と赤と青の色彩を髣髴させるものであった。部分的にロセッティが描いていたものを見てバーン＝ジョーンズは「ロセッティの作品の最高の特徴を表わすものであり、聖杯の幻視を恋人に隠して誘惑の木の幹の間に林檎を持って立っているグウィネヴィアを他の誰が描けたであろうか」⁽⁶⁾と言ったという。ロセッティはオックスフォードにいる間は一行のリーダーであり、豊かな発想を皆に与えた。「ロセッティは惑星であり、それを中心に私たちは回転した。彼の話し方を真似て、美人のことをくスタナーと言ったり、ウォンバットをとりわけ愉快的な生き物としたり、中世主義が私たちの理想の美であった。それに自分たちが崇拝するロセッティの強い性格に自分たちの個性を度外視するほどであった」⁽⁷⁾とプリンセプは打ち明けている。ヒューズは貧しかったので自分の負担分を急いで仕上げてもっと儲けのあるイーゼル画を描くのに時間を使おうと思っていた。

スペンサー・スタナップとバーン＝ジョーンズとの友情はこれらの日々には遡ることができる。彼はバーン＝ジョーンズのことを「時間が経つにつれてネッドにますます惹かれていくことが分かった。装飾していたスペースが隣どうしであったので、彼と親密に接触することになった。彼は上機嫌で戯れの性格があるにもかかわらず、モリスを除くと他の誰よりも自分の仕事に打ち込んでいた。自分の絵をよくすることができると思える間中、彼は絵から離れられないようであった。それに私も自分の制作が遅れていたのだから、皆が去った後の数週間、そこで仕事するのが私たち二人だけになった。それに気づいたもう一つのことは、彼が戯れやふざけるのが好きなのに、運動の試合や体操などにまったく無関心であるように思えたことであった」⁽⁸⁾。悪ふざけでさえ依然として彼の魅力を失わせないようであり、他の人々の迅速な仕返しがまた当時の日々を面白くしたといってもよい。ロセッティとネッドはモリスのカリカチュアをいつも描いたが、モリスも気さくにその笑いに加わった。

ロセッティとバーン＝ジョーンズとヒューズがある晩、劇場に行ったさいに彼らの上の桄席に妹と二人でいたジェイン・バーデン嬢を見かけた。彼女はオックスフォードに生れ育ったが、ホリウエル街65番地で貸馬車屋を営んでいたロバート・バーデンの娘で、脊が高く首が長く、顔は象牙色で濃い眉毛と波状の黒髪が豊かで、その美しさはモリスが見逃しそうにない珍しく際だったタイプの容貌であった。ロセッティは早速自己紹介をして彼らのモデルになってくれるように頼んだ。当時ロセッティが描いた彼女のペン画（現在はダブリンのナショナル・ギャラリーにある）は、美しい芸術作品であると同時に非常に忠実に描かれた肖像でもあったとジョージアナが述べている。これ以後は彼女がラファエル前派の中心的なイメージの位置を占めるようになり、グィネヴィア、イゾルデ、ベアトリーチェ、あるいは永遠のファム・ファタル（男を危険な破滅に追いやる危険な美女）のモデルになった。彼女の容貌は画家

の倦怠感や恍惚感の靈妙で繊細なニュアンスを表わす魂の美的象徴になった。後にモリスが妻になる彼女に会ったのは夏休暇の最後の日で、彼にはそれまで偶然にも会う機会がなかったようである。

バーン＝ジョーンズは11月の始め頃まで依然としてオックスフォードにいて、忙しそうに壁画を描いていた。そこへラスキンが来てロセッティの絵は色彩が世界で一品だと断言し、その次にバーン＝ジョーンズを彼が選んだという。しかしプライスの11月14日の日記の記載によると「ロセッティは不幸にもマトロックのシダルの病気で呼び戻された」とあり、それ以来彼はオックスフォードへは戻らなかったという。その頃モリスは会館の壁画だけでなく天井の彼の制作も終えていた。しかしバーン＝ジョーンズの会館の仕事は1858年の2月末まで続いた。というのも、彼はクリスマス休暇のために帰郷したり、その後にはロンドンへロセッティに会いに行ったりしていたからで、新年のある日、彼は父親に「彼（ロセッティ）とまた会えるのでとても楽しみです。オックスフォードの私の絵はまだ、完全に仕上がっていませんが、もうほとんど終了するところです……先日の『タイムズ』紙を見ましたか。（会館の壁画のことが）『タイムズ』や『サタデイ・リビュー』紙に載っていました。それから『モーニング・クロニクル』にも、フランス政府の新聞『モニトゥル』にも載っていましたし、『ビルダー』誌その他にも載りました。—私も有名になったものです」⁽⁹⁾と書いた。サンプスンにも同時に「今日、家で始めていたピーターI世の絵を完成しました。ハントにも会ったのですが、オックスフォードの私の絵をどえらく褒めてくれました—それで私もゆっくりと良くなって、予想外に遥かにうまくやっています。おそらく金持になるかも、もっとも私としての金持だけどね」⁽¹⁰⁾と書いた。しかし壁画は間もなくしてかなり剥げ落ちてしまった。ホールの煉瓦の壁は耐湿加工がされておらず、下塗りしなかった凸凹の表面に埃が付着し、色は壁体に吸収されて思うように出せなかった。照明に使われたむきだし

のガス灯の煙と熱がさらに災いして、翌年の6月にベル・スコットが見に来たときは、前景の向日葵が並ぶ上に見えるべきモリスの絵のトリストラムの頭部を確認できる以外ほとんど何も見えない状態になっていたという。当時のイギリスの画家たちは壁画の技法を自分たちに必要なものと見なしていなかったようで、そうした能力の欠如をきたしたと見ることができよう。

バーン＝ジョーンズはロンドンから離れる機会を利用して顎髭を伸ばし、かなり容貌を変えた。言うまでもなくその伸ばす途中は醜い格好であった。自分をカリカチュアに描いて「オルゴールの中身をひっぱり出したみたい」と言葉で表現している。残念にも立派な髭を生やした彼の肖像以前のこの状態の写真は無くなっている。バーン＝ジョーンズは「至福の乙女」のもっと大きなサイズの別の二枚目の絵が欲しいと述べ、先払いの決算書を添えたプリント氏の手紙をその年明けの1月2日に受け取った。作品の先払いをするプリント氏のやり方は、ある意味では便利で助かるようでもあるが、他の面でそれほど良くないこともある。というのもパトロンと画家の両方が生きていうまく行ってないと、それが大きな不安の原因にもなるからである。バーン＝ジョーンズが健康であれば言うまでもなく、そのような依頼を成就できるに違いないが、彼はその年のように体調を崩すと、その重荷や憂鬱を感じてしまった。オックスフォードの仕事を終るまでの熱狂によって彼には力が与えられ、その期間中は「すこぶる良い」健康状態であったが、今度ばかりは他人にもどうもまったく違った事例であることが明らかなように思えた。過労から衰弱、次には経過によっては、ありふれた風邪から彼は生涯マラリア風のあらゆる影響に過敏な特異体質から重い病気の悪寒に見舞われることがあった。彼はロンドンから戻るとこれまでの二年間に支えてくれていた心身両面の彼の背伸びした力が急に衰えてしまい、またロッセティとの不規則な時間と食生活も原因であったかも知れないが、彼自身にはどうしてそうなったかも知れず、非常に衰弱し、二、三日は頭に手をや

ることさえできなかった。その病気になる直前にプライスへ書き送った走り書きによって、オックスフォードでの仕事とクリスマス期間の楽しい日々の終りに彼が非常に憂鬱に感じたことが明らかになる。「とてもさえない。ああ、ひどく憂鬱だーあの楽しい時はすっかり去ってしまったように思える。毎朝の目覚めは惨めなものだ」。少し後には「ずっと気分が悪くて、起きているのはちょっとだけだー明日はカンパウエルに行つて、まともになるまで叔母のところ滞在する。トプシーはオックスフォードにいるかい。彼と皆によろしくー彼には収納家具の絵がもっと進むまでこちらへは来ないように伝えてくれ」⁽¹⁴⁾。モリスはプリント氏に依頼された仕事の「トリスタンとイゾルデ」の絵をオックスフォードにいてほとんどずっと制作していた。それでバーン＝ジョーンズは週末に友だちに会うこともあったが、レッド・ライオン・スクウェアで一人で過すことも多かった。彼のいう収納家具の絵とは「女修道院長の話」のことで、背景を別にする構図は40年後にニュー・ギャラリーに最後に展示する高度に仕上げた彼の水彩画とほとんど同じ内容であった。

3月の少し前にバーン＝ジョーンズは自分で非常に良くなったと宣言し、その月の21日にはジョージアナを連れてラスキンに会いに行った。ナショナル・ギャラリーの彼を訪ねたのである。そこでラスキンはターナーに遺贈された素描の分類・保存の仕事をしていた。彼は二人を非常に親切に迎えてくれて、彼がその仕事をしている間は広げられている素描を自由に楽しむように取り計ってくれ、特別な事柄も指摘してくれた。また彼はチャールズ・イーストレイク卿が最近イタリアから持ち帰ったが、まだ館内にかけてない昔の数点の絵も見せてくれ、ジョージアナにバーン＝ジョーンズの作品を文句なしに褒めてくれて、黄金の時間であったと彼女は述べている。バーン＝ジョーンズは、その後林檎の花をもう一度描こうとしてアーサー・ヒューズが滞在しているメイドストーンに絵を持って行ったが、やはり冷たい風に阻まれてしまった。二、三通の手紙からマドック

ス・ブラウンと彼との優しい関係が明らかである。

メイドストーンから戻って間もなくしてバーン＝ジョーンズに健康状態が警告を発した。初夏が激しい暑さで、レッド・ライン・スウクエアは木陰でも華氏90度になって彼にとって適さない所になったのである。それでプリンセプ夫人は親切にも彼をリトル・ホランド・ハウスへ連れてきて、新しいお医者のもとで治療することにした。オックスフォードのハリー宛のジョージアナの母親の手紙によると「最近のバーン＝ジョーンズは健康状態が非常に弱まり、彼に関してかなりの不安があります。現在彼は油絵の具を触ることが禁止され、かなり規則正しい生活をしていますが、室内で床に伏せた人を想像できるくらいに衰弱しています。ブライト医師はプリンセプ夫人に、このままバーン＝ジョーンズが自分の体のことに注意を払わずに仕事を続けていたら、彼はまったく手後れになっていたでしょうと言われたそうです」⁽¹²⁾と書いた。バーン＝ジョーンズはこの病弱な健康状態の外にも仕事の遅れや、父親のことが心配でならなかった。プライスに「家から長く何も知らせがない、父が商売上の問題を抱えたようでーポプラ・プレイスを諦めるようだ。経済状態がとても悪いのではないかい、クロミー。君にとっても会いたい。お金があれば日曜にもオックスフォードへ行かれたのに、数か月の費用として2ポンドしか自分のポケットにないことに先週の日曜まで気付かなかったのだ」⁽¹³⁾と書いている。

彼らの仲間たちにも悪い時期が重なった。ロセッティのシダルも相変わらず健康が優れず、マドックス・ブラウン夫人の長い病気も夫に重い負担をかけていた。バーン＝ジョーンズは彼に「私は貴方の奥さんの病気が今も思わしくないと聞いて心が痛みますーできるだけ早くもっと良いニュースを書けるようになって下さい。とても心配です。私もまだ外出はしていませんーしかし貴方も楽しくないときには私のつまらないことでご迷惑をかけたくありませんー感情にさわることに違いないのですが、現在の状態ではアカデミーの

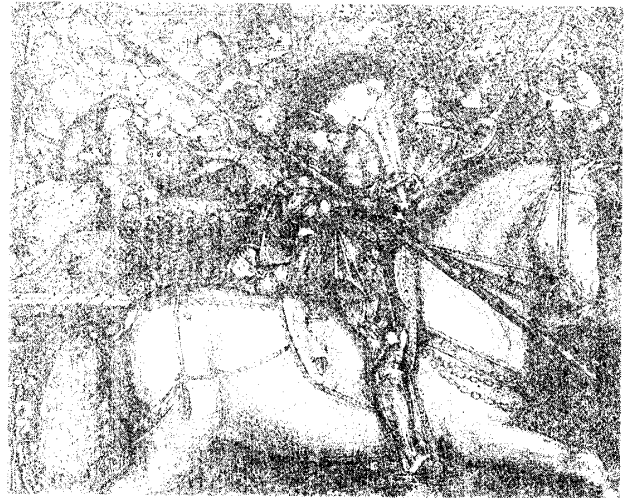


図2 「ガラハッド卿」, ペンとインク, ヴェラム。1858年。アメリカ, フォッグ美術館蔵。22.5×19.12 cm。

ことは諦めた方が良くはないでしょうか」⁽¹⁴⁾。またマドックス・ブラウンは、奥さんの病気の間に彼の三歳になる幼児のノリイを二、三日間バーン＝ジョーンズの父のところへ連れて帰ることを許してくれ、バーン＝ジョーンズに大きな自信と誇りを与えた。

6月の半ばになってバーン＝ジョーンズは、マクラレン夫妻の記念祝典に招待されたサマータウンへジョージアナと彼女の妹を連れて行けるほど丈夫になった。間もなくして彼はリトル・ホランド・ハウスに戻る前にオックスフォードに一週間ほど滞在した間にも再び衰弱してしまっただが、サマータウンの新鮮な空気と田園生活が役立ち彼の精力が回復し、気分も良くなり元気になったようだったが、部屋で一人ソファーに座っていたある日にまた気を失ったことが分かった。しかし滞在期間中はほとんど素晴らしい天気、バーン＝ジョーンズは『アーサー王の死』の文章をかなり朗読したり、イギリスやフランスの昔の歌を歌ったり、桜んぼを沢山食べ、互いに物語を語り、随分と笑った。バーン＝ジョーンズは仕事も持っていたが、なかでも忙しく描いていたのがペン画の「ガラハッド卿」であった。バーン＝ジョーンズがロセッティと出会ってから制作した作品を要約するとステンドグラスを別にすると師の影響もあって、その媒体はペンとインクの素描が多く、

その題材の源泉はマロリー、中世のページェントとあまり多くないが近代詩及び聖書であった。しかしこれらのすべてがロセッティの影響というわけではなく、オックスフォード在学中にモリスと共に中世的な図像にかなり夢中になって彩飾手稿本を調べたり、中世の物語に浸ってその細部に及ぶ知識を獲得していたことが大いに影響したのは確かである。またマロリーの発見は師とは別個であった。モリスは1857年に『グィネヴィアの抗弁』という詩作をして出版した。その内容はテニスンに負うところが大きい。モリスはテニスンのガラハッドを「軟弱な青年」だとして批判的であった。モリスの詩の力は俗世間の魅力を知っているという点でテニスンの聖人のような性質を備えた騎士より遙かに複雑である。この両方の詩を知ってバーン＝ジョーンズは騎士の素描をモリスの見方に沿って選んだようで、ガラハッドは歡樂にふける仲間の騎士たちの脇を通り過ぎて行くか、その夢を見ている構図になっている。この作品はアルブレヒト・デューラーの1517年作の銅版画「騎士と死と悪魔」を参考にしたことがうかがえる。スタンドグラスの絵については、別の章で論じることにする。

後にアトリエの助手になったT. M. ルックに話したところによると「ロセッティはペンとインクで素晴らしい下絵を描いた。私も生徒のようにして彼の見真似でやってみたが一満足なものは決してできなかった」⁽¹⁵⁾。そして後にバーン＝ジョーンズはこの「エッチングやスクラッチングで隅々を埋めてしまう」のを止めて、主として鉛筆やチョークで練習することにしたという。バーン＝ジョーンズはやはりリトル・ホランド・ハウスで「騎士の別れ」を描いた。この絵の手の込んだ陰影法はロセッティの素描に見出せるものであり、騎士の旗に装飾的に描かれた天使はロセッティの「ベアトリーチェの挨拶」の中央の像を描き直したものと言ってよいくらいである。その絵の右の方の男は「聖杯探しの話」を読んでおり、その探索に出かけるつもりである。

またロセッティとジョーンズは騎士が出陣する



図3 「騎士の別れ」, ペンとインク, ヴェラム。1858年。イギリス, 個人蔵。15.9×19.1 cm。

さいの悲劇的な雰囲気を好んで描いた。バーン＝ジョーンズの「出陣」はことに繊細であった。長く垂れる髪の三人の乙女が恋人に投げる薔薇を摘む姿を描いた。その背景にはデューラーの影響も見えるが、少女たちの衣裳の様子が絵の構図にも発展して、背景と前景を同一平面に圧縮させて意



図4 「出陣」, ペンとインク, ヴェラム。1858年。ケンブリッジ, フィッツウィリアム博物館。22.5×19.5 cm。

味深長に平面的に描く手法はロセッティによく見られる趣向である。これまでの時点の作品では「出陣」がとりわけ効果的なデザインになっている。少女たちの垂直の姿と騎士たちや城壁、それに薔薇の生垣による副次的な水平によって均衡が図られ、騎士たちが持っている槍と少女たちの衣裳の模様が造り出す斜め線の動きを中軸に鸚鵡や少女の一人が持っている小枝による非対称的な要素がさりげなく配置されていて、平面的だが複雑な形象の印象を与える。1856-59年まで彼はこうしたペンとインクの作品を中心に制作した。これらの小さな素描なら彼が体調のよくない時も好都合で、実験的にも描けたのであろう。彼はこれらの他に「王の娘たち」(1858-9)や「賢い乙女と愚かな乙女」(1859)などのペンとインクの素描も制作した。

親切なプリンセプ夫人がバーン＝ジョーンズにロンドンに戻って来るように招き、彼が戻ってみるとテニスンがリトル・ホランド・ハウスに居ることが分かって嬉しかった。バーン＝ジョーンズがテニスンに最初に会ったのがその時であった。当時テニスンは人々から悪口を言われていた日々であったが、彼はその時期に<国王牧歌>を書いてそれに応えて、皆が満足して彼を褒めたが一『詩集』や『モード』を書いたさいは冷たくあしらわれた。「ヴィヴィアン」はすでにこの年の二年前に書かれていて、当時は著者が彼女を「ニミュー」一すなわちマロリー著『アーサー王の死』に表された湖の麗人の名前と呼んでいた。それはオックスフォードの絵でバーン＝ジョーンズが想像して非常に親密に扱った主題であったが、国王牧歌の詩人が古代の名を保持しながら近代的になって性格を変えたことが分かったバーン＝ジョーンズの苦痛に満ちた顔や気持をプリンセプ氏がこのように思い出している。「テニスンは、気さくなくそれを<ヴィヴィアン>に変えてしまった」とい言ったという。ラスキンもリトル・ホランド・ハウスに姿を見せてバーン＝ジョーンズの下絵を見てある日「ジョーンズ、君はジャイガンティックだ(素晴らしい大物)！」と彼が大きな声

で言ったので、この頭韻法がテニスン卿の耳を喜ばせ、それがバーン＝ジョーンズのあだ名になってしまい、彼の友人たちから「ジャイガンティック・ジョーンズ」と呼ばれ放しであった当時のことを、テニスンとプリンセプ両氏が人に話して喜ばせたり、楽しませたりしたという。

バーン＝ジョーンズもこのことは意識して自分を確信していたが、リトル・ホランド・ハウスの新しい雰囲気には休息と同じくらい多くの刺激を見出し、必要なのは休息だけでは決してないと思った。そこは彼にとってそれほどの意味があったのである。そこで彼はごく当たり前の生活の美に取巻かれていることに自ずと気づき、何らかの賞賛と熱狂を目覚めさせない日はなかったと後に述べている。初期に文字どおり渴望していた目に見える美があり、愛や愛情溢れる世話にこと欠かなかった。そして住居を取り巻く見事な庭は他の場所から隔絶された彼の魅惑の世界であった。夏の時期の特に日曜日には、そこにイギリスの異なった社交界の著名人たちが集り、それらの面々をもてなす夫人に何かの理由で認められると、老若、貧富を問わず、誰でも歓迎された。立派な芝生の一部は当時の主な戸外遊戯場であってクローケー―それから別のボール(木球)ころがし、あるいはそうした遊戯をしない人には他の場所でキャンプする光景もあった。卓上には赤い丘のようにとりわけ粒が大きく良く熟れた苺が盛り上げられた。プリンセプ夫人の姉のカメロン夫人が写真機をもってやって来たさいは、友だちの恐怖と笑いが入り交じった。彼女の予測できない方法や、人を乗せてしまう菌切れ良い言葉や気配りの演技が皆を惹きつけた。しかし彼女のレンズは無情で、ある時ブラウニングが彼女に庭で出窓のところまで連れて行かれ、彼女のモデルとして奇妙な衣服を纏わされたまま、彼女が他の求めに応じて去ってしまっただけで怒るやら、いらいらしたりした話も残っている。ヴァル・プリンセプは父のもとで暮した間にバーン＝ジョーンズが疲れ果てているのを見ると、プリンセプは腕に抱えて階段を登るほど力が強かった。そしてバーン＝ジョーンズが眠れ



図5 「ブオンデルモンテの婚礼」, ペンとインクと灰色ウォッシュ, ヴェラム。1859年。イギリス, 個人蔵。

ず弱ってしまって頭が時々くらくらすることでもあり、まるで弟のように友の脇にマットレスを並べて床に敷き「付きまとう幻の追払い」をしてくれた。

後にプリンセプ夫人の妹のソマーズ夫人がボームント街のマクドナルド家を訪れ、ジョージアナの母親と会った。ジョージアナは間もなくして姉と一緒にある晩リトル・ホランド・ハウスに招待されて夕食を共にした。プリンセプ氏は視力が弱いので居間が少し弱い照明になっていたが、色彩豊かに装飾された部屋や、ワッツ氏の美しい人物像の優雅な作品が沢山あるアトリエに通じるやや暗い廊下の印象の外は全体的に暗いイメージがなく、特に「ソビイ叔父さん」の寝椅子の置いてある部屋からは笑い声が聞えて、話しにきて順番を待っている訪問者もいた。テニスンはその時は見かけなかったが、バーン＝ジョーンズによると、彼がいるといつも興奮を感じたという・・・プリンセプ夫人がアイルランドとフランス系の血筋であることが分かって、それが素晴らしく陽気なことの原因とも思われると、ジョージアナはリトル・ホランド・ハウスの印象を語っている。

一方モリスとロセッティはバーン＝ジョーンズが長くリトル・ホランド・ハウスにいることに疑問を持ちだした。ロセッティはその状態に彼が埋れてしまうかも知れないと思い、元来から繊細な彼に悪影響しないかと心配であったし、モリスは全般的に当時の文学と芸術界の背中合わせの状態

に批判的な口調であった。そしてそこに居た名高い画家のワッツは国際的なアカデミー様式の基礎をしっかりと身につけており、バーン＝ジョーンズに受け容れられそうな類の絵の手ほどきをしようとした人物であったのでロセッティはアカデミーの諸々の規則をバーン＝ジョーンズに教え込んで欲しくないと願ったのであった。ロセッティは彼の詩「至福の乙女」に基づく絵を注文してきたリーズの株式仲買人のプリント氏のことについても触れ、報酬を前払する彼の習慣は、画家がまだ無名の内に安い価格で作品をものにする巧妙なやり口だから心配などする必要はないと書いた手紙を出した。ロセッティたちの心配は実際に根拠のないものではなかった。20年後にバーン＝ジョーンズは「ワッツは私に素描をもっと上手に描くように強いた」と述懐している。やはりワッツはロセッティの即興的な描き方は不十分でもっと着実な基礎が必要なことを認識させたようで、ワッツの影響は急速にバーン＝ジョーンズの作品に入り込んでいった。ワッツは1840年代にブオンデルモンテ（13世紀前半のフィレンツェの皇帝党の指導者だが、1215年の復活祭に殺されたために、ゲルフ（教皇党）とギベリン（皇帝党）の間で内乱が起きた事件の中心人物）を主題とした絵で、具体的にはポルティコの下から上を見ると美しい貴婦人が目に入り、その美しさのために殺される」男の物語に基づく一絵を描いたが、後にバーン＝ジョーンズも同じ物語をプリンセプ家に

滞在していたさいにペンとインクの素描で二枚描いた。一枚は人物を多く容れた細長い構図の絵で、他はブオンデルモンテが二人の美少女の前を通り過ぎる情景を描いたもので、これらは油彩のための下絵であったが実際に制作されることはなかった。しかしその習作が三点は残っており、現在はアシュモリアン美術館とマンチェスターのホワイト・ワース・ギャラリー（未完）にある。それらには構成と明瞭さが大事であることをバーン＝ジョーンズが認識しだしたことがうかがえ、デザインが遥かに優れたものになっている。フィッツウィリアム博物館のは、ブオンデルモンテ（ゲルフ党）がすでにアミデイ家（ギベリン党）の一人と婚約していたが、未亡人のゲルドラーダ・ドナーティ（ゲルフ党）が自分の娘と結婚させようとして彼に会わせている場面である。この素描の右には彼の婚約した花嫁が船でフィレンツェに接近してきており、中央では結婚式の準備をしている人物が沢山描かれている。その前景には戦いの神のアペレスの立像があるが、この台座のところでブオンデルモンテは殺害される。この絵はG. P. ボイスが日記で「ラスキンのための素描　－フィレンツェ史の主題」と指摘したものであろう。彼によるとバーン＝ジョーンズは1859年1月に制作を始めたが、仕上げたのはその年の暮になったということである。

ワッツはイタリア美術を高く評価していたから、その重要性も印象づけたに違いなく、その研究をする必要をバーン＝ジョーンズはこの時期に感じだしたようである。これまでにイギリスのコレクションやルーヴルでイタリア絵画は見ており、印刷物や版画でも学んでいたが、ワッツの教示を受けてイタリアを訪れて自分の目で見たいと思うようになったことも確かである。

プライスはかつて学位試験の読書を夏期休暇中に行なうためにレッド・ライオン・スクウェアの家を借りたし、ロセッティもブラックフライアの窓下の河の悪臭でアトリエから追い出されて来たこともあった。彼らは家政婦のメアリーが好きな人物で、住人ともども彼女は喜んで面倒を見てく

れた。これらの部屋に落ち着いたさいには旧友たちや新しい友達も交えて兄弟団のような生活が続けられた。壁に中世の場面を描いたり、一日中懸命に励み、夜には「メキシコ式決闘」と名付けた暗中で暖炉の薄明かりで行われる枕試合のようなものを始めて楽しんだが、バーン＝ジョーンズはそれにことよせて毒を盛られた修道僧の血も凍るような口調や、意味のない早口言葉で喋る白髪の幽霊の声を上げるのが得意であった。朝にはラスキンが訪れて、彼らの作品についての褒め言葉や厳しい批判を丁重に聴いた。ロセッティが来ると雰囲気が一層にぎやかで無礼講になり、あけすけの男の会話や冗談に満ちた。ある日、下宿屋の少女が「主教さまが教会の装飾のデザインでお出になりました」と伝えたら、ロセッティが「忌まわしい主教を上に通しなさい！」と大声で怒鳴ったのが戸口に響きわたり、下にいた修道院長の耳にも達して当惑させたこともあった。バーン＝ジョーンズは初めてここで一人に近い生活をすることに気付いたが、すぐに友達が続いた。大変嬉しいことにヴァル・プリンセプがハウランド街の向いの隅の家の二階部屋に住むことになって近い隣人となった。プライスは10月に学位は取得したが、医学の資格試験のためにオックスフォードに残ることになり、教会に入ることは完全に諦めて医師になるつもりでいた。

しかし1858年にはあれやこれやの理由でモリスとバーン＝ジョーンズが同時にいることも少なく、この年のように友だちに会えないことはかつてなかった。そしてその夏の初めにモリスは、バーン＝ジョーンズにバーデンとの婚約を伝えに来た。誕生日祝のために二週間ばかりバーミンガムに帰ると言ったバーン＝ジョーンズの計画は三週間に延びた。その間にマドックス・ブラウンは50ポンドの賞をリヴァプール・アカデミーから受けた。9月の中旬にモリスはフィリップ・ウェップとチャールズ・フォークナーとの三週間のセーヌ河のボート遊びから帰ってすぐに彼の家を建てる計画で忙しくなり、レッド・ライオン・スクウェアでの日々は実質的には終わってしまった。バ

ーン＝ジョーンズの健康状態もプリンセプ夫人の手厚い世話のお陰で平均的な状態に回復した。「彼女は私の知るなかで母親に一番近い人であった」と彼は回想している。彼にとっては新しい生活であったリトル・ホランド・ハウスで過した時間は楽しみの多いものであって、それが気分転換になったことは確かであるが、だからといってそれが以前のすべてを忘れさせることにはならなかった。彼は以前よりもっと熱心に仕事をしなくなって、新しい退屈な部屋探しという問題と直面した。

彼は引越するさいに「これまでになく疲れた一週間を経験して、かなりへとへとになった一部屋は馴染めて非常に良いし、照明も良く、広くてさっぱりしている」⁽¹⁶⁾と書いた。それはラッセル・プレイスとハウランド街の隅にある家の二階にあった。ラッセル・プレイスは後にフィッツロイ街のフィッツロイ・スクウェアの一部になった。この当時では芸術家の存在があまり意識されておらず、アトリエという名に相応しい天井のところまで窓が高く開けてある部屋が見つかったこの場合は、バーン＝ジョーンズが予想もせず、意図もしなかった非常な幸運という外はない。ヴァル・プリンセプはパリに行き、コーメル・プライスがまだロンドンに来ていなかった期間はバーン＝ジョーンズが一人になって、彼は異常な憂鬱におちいり、この春オックスフォードのトルボーイズ夫妻のところに滞在していたジョージアナの妹にこのような手紙を書いている。「私は非常に心配で、物事がうまくいかないのです。それも自分が大馬鹿で、ちっとも描けないし、恥かしく思うことばかりして、手紙の返事も書かず、質問に答えず、キリスト教徒がなすべきこともまったくしないからです。だから大切なトルボーイズ夫人がとても親切な手紙を一か月は前に下さったのに、返事も書かずに自分が恥かしいのです。貴女にとっても会いたいです。そして貴女の作品〔本口木版〕を見て、隅に小さくL. MsとE. Jsの絵本を出版して、人々がアルブレヒト・デューラーが返り咲いたと言うようになるのにどれくらいの日数

が必要かを計算してみたいです」⁽¹⁷⁾。それから彼は「クライスト・チャーチの首席司祭」、つまり大聖堂のフリデイスウィデの窓の仕事の約束でオックスフォードへ来ることになっていると書いた。

モリスはすでに、友人のウェブの手伝いを得てこれまで胸に暖めてきた家の思いどおりの建設計画で頭がいっぱいであった。二人を満足させる必要から田舎であって、特に林檎の木に囲まれた場所が理想であったが、道路沿いで草地に囲まれ、樹木にほとんど邪魔されずに建てられる空間の余裕がある果樹園をケントのベックスリー・ヒース、アプトンに見つけた。それほど大きな家ではないが、全体的に考えて建て添えをしても難無く形態が損われないようにできるデザインということで、依頼主と建築家が確かに一致して幸運な建物になった。その家の設計はモリスの結婚前に完成され、施工するばかりになっていた。ロセッティは言うまでもなく、モリスが購入した土地に近いところが近所で「豚の穴」と呼ばれていることが分かって楽しくなり、すかさずその家のことをこの名前でそれとなく表すことにしたが、その家の完成後にはそれに関する真面目な考えを、ある友人宛に「モリスの建てたケントの家を見たいと願っている。とりわけ高貴なもので、感じはまさにあらゆる点で家というよりはむしろ詩であり、住み心地も上々である」と書いた。

1858年にロセッティが創設した芸術家や詩人、建築家たちの協会であるホガース・クラブについて触れておく必要があると思われる。これはロセッティを中心にした画家たちの展覧協会で、画家たちが展覧スペースと集会所を求めて創設された団体である。確かにそれは失望に終わったものの、その創設当時の話はその会員にとって非常な楽しみであり、そのクラブ自体が続いた間は彼らにとってのもう一つの集会場として何らかの利益があった。かなりの数の芸術家が会員になったその運営の仕事の大部分はスタナップとバーン＝ジョーンズに任せられた。展覧会は1861年まで続き、出品の貴重な場を提供した。しかしバーン＝ジョーンズが最初に意図していたことと反対の規則や

公的会合、議題の可決などに絡むことが次第に分かって困惑したことを彼は述べている。「スタナップと私は自分たちが自由に話せるクラブができるのなら素敵なことであった。だけど私は大間違いをした。そして敬意を払うつもりで、カーライルを（名誉会員に）選出し—その後、彼にすべての規約や会合、休会、会合の延期や変更の知らせを送った—のだが、ついにある日、彼の知合で私たちも知っている友だちと話している内に、ホガース・クラブの意志疎通が彼をやり切れなくさせつつあると知らせてくれる人がいて、そのことについて別の会合を開いた。それは大笑いの会合になったが、いかにユーモアがあっても、カーライルが将来の苦悩から除外されるべきだという提案をして可決せねばならなかった。すると誰かがその決議文を彼のところへ送付すべきだと提案した。他の人はこのように敢えて彼に迷惑をかけることが非常に親切なことだと言った」⁽¹⁸⁾。こうしてそのクラブは自然消滅した。

1859年2月にバーン＝ジョーンズは「私はこれまでになく忙しいので、邪魔や無駄話しの時間は決して持ちたくない。何とかしてそうせねば—そうできたらなことだが。人が訪ねてくれば対応せねばならないので、それが制作中だととても疲れを感じる人が多い。最近目は—多分寒いからだと思うが—とてもかすむが、今日はましな方だ」⁽¹⁹⁾と書いている。彼はオックスフォードとレッド・ライオン・スクウェアでの楽しい夕べの連帯感に終止符を打ち、彼に残された時間を制作の目的にだけ使った。先ず彼はリーの実物モデルの画学校に行くことが多く、それから労働者大学へ行ってマドックス・ブラウンの授業の一つを自分が受け持ちその前にも彼の手伝いをした。ブラウン氏への鉛筆の走り書きがこれらの日々を思い起させる。「汚れた紙をお許し下さい—手が木炭だらけで—同日に二回も手を洗いたくないのです・・・強欲に仕事はしたくないのですが、すべてを決りでやるには、できるだけ急がねばならないのです—それにリーの画学校の新しいモデルの最初の晩です—このところ二週間

は良い場所を確保したいものです—それでWM（労働者大学）へ来るのは9時か8時半になるでしょう」⁽²⁰⁾。

その当時の生徒で時には先生もしたJ. P. エムズリ氏はラスキンやロセッティ、バーン＝ジョーンズの個性をはっきりと追憶している。ラスキンはその当時の芸術の欠点が明暗を十分に理解せずに色彩を使い出すことにあると考えていたので、生徒が長く白黒の素描をしてからやっと色彩を使いだすのを許した。しかも色彩になっても生徒を筆使いに慣らすという意味で、プルシアン・ブルーだけで習作を何枚も描かせた。ロセッティといえば、誰にも最初から色彩を十分に学ばせたので、ある晩ラスキン氏の授業の部屋を歩き回りながら、ここのやり方の計画を見て怒りの気持で一杯になった。「これは何だ。青の習作ばかりじゃないか—青以外に誰も色彩は見えないのかい?」。「ラスキン先生の教えなのです」と生徒の一人が答えた。「なら、このプルシアン・ブルーは一体どこで買ってきたのかい」とゲイブリエルは聞いて、ただちにその問題の根に直行して、その部屋の戸棚を開けて中に入っていたものを見て怒りを新たにした。彼は大声で「ああ、これは驚いた。このひどい色彩が数ダースはある包を見つけたぞ。ああ、このまま放っておけない。ラスキン先生は皆の色彩の目を駄目にしてしまう—私が全部没収しよう。そうしなければ。生徒のためにならない。私が全部持って行ったら先生には伝えてくれ」⁽²¹⁾と言った。二、三日後の晩にラスキンは大切なプルシアン・ブルーが全部なくなっていたので、どうしたのかと聞いて、その原因が伝えられると突然何か非常に可笑しいさいの、いつもの存分な大笑いになった。

バーン＝ジョーンズの名前は1859年1月から1861年3月までの大学案内にも載っていて、それが目に映って気にいらなかった。というのも彼は何でも形式的に教えることは心から嫌いであったからである。エムズリの話によると、バーン＝ジョーンズは生徒に先生であると同時に自分たちの同僚だという感情を残し、いつも生徒に考えさ

せ、それぞれ自分で見て各自の作品に自信をもつようにしようとしていたという。そして彼らが受けた別の印象は、世界のどの時期の良い芸術作品にも自分なりに喜びを感じる強力な意識があるというものであった。彼は大英博物館にある彫刻をモデルにして描くことを勧め、見たものと見たことのないものを熱心に解説したが、類縁関係にあるような芸術家の作品を軽蔑して話すことは決してなかった。「いかなる芸術に対しても批判する極限の言葉がくそうだね。私には興味がわかない」⁽²²⁾とエムズリは述べた。そうして彼がいつも思い出すのが、バーン＝ジョーンズがよく言っていた「良くない絵でさえも描くのは容易でない」⁽²³⁾という言葉であった。これは彼が自分の考えを宣言できる時期にまだ達していなかったのではなく、人の作品を軽々しく非難したりけなす趣味がなかったということである。

「すでに2月も半ば過ぎてしまったけれど、毎日描いているのにまだ作品にとりかかれたと思えないのだ。はやく自分の絵の主題が決められれば、それで落ち着くのですが、今はまだ不安や心配がいっぱいで、物事すべてに悩みを感じるのです。マクドナルド一家はあと6か月するとロンドンを離れることになり、そうすると私はとてもやる気がなくなる。いや大丈夫、まだ6か月あるので、先のことは何も心配しないことにします」⁽²³⁾と Sampson さんに書いた。

1859年4月にモリスとジェイン・バーデン嬢がオックスフォードで結婚することになって、バーン＝ジョーンズや他の仲間たちが多く出席した。牧師になったディクソンは言うまでもなくロンドンからやって来て二人の式の主役をしたが、最後に「ウィリアムとメアリー」の名において夫と妻になることを誓いますか、と言ってしまった。モリスは新婚旅行に行って不在になり、これまでのそこでの生活は終って、バーン＝ジョーンズにはたいして輝かしいことはなかった。新しい秩序が始まることを意識して変えようとする空気も起り、イースターの頃には果してその部屋を借り続ける価値があるのかどうか考え始めていた。レッ

ド・ライオン・スクウェアの部屋の住人はモリスとバーン＝ジョーンズが学生会館の絵画制作のさいに知合ったスワン氏に移ったが、彼は家政婦のメアリーが「あの、もし、バイロン出身の方が会いに来られましたよ！」と大声で言って通したという風采であった。彼女は彼の世話もし、結婚するまではモリスの刺繍の仕事も手伝った。

マクドナルド家は9月初めにいよいよマンチェスターへ引越すことになったが、バーン＝ジョーンズのこの事態を運良く軽減できるのは、フォクナーやヴァル・プリンセプたちとの北イタリアへの二、三週間の旅行計画に参加することであった。バーン＝ジョーンズは憂鬱にもかかわらず一年中とくに一生懸命に仕事をした。オックスフォードのクライスト・チャーチのセント・フリデスウィデの大きな窓の下絵が仕上がったのも、旅行のこの上ない良い機会であった。また彼が必要な日時に丁度良くモリスとロセッティの助言が得られたので、初めてイタリア旅行をする気になった。父親と一緒に誕生日を祝うために、彼は旅行前にバーミンガムへ行ってから友人たちに加わった。

彼がイタリア旅行で見た諸都市やそこにあった絵画はまさに彼の願望の成就であり、獲得できる意外な新事実であったので、自分の欠陥をもはや恐れなくなって、良くない作品を見てもがっかりしたり、活気を失うよりは、最良なものから常にヒントや生気を得ることが多くなったという。ジェノヴァ、ピサ、フィレンツェ、ミラノ、ヴェネツィアで4週間過したが、行く先々で彼は描いたりノートを取ったり、ジョット、オーレアーニャ、マンテーニャ、ティチアーノ、ボッティチェッリ、ティントレット、アーニョロ・ガッティ、ベノツォ・ゴッツォリなどの模写をしたりしてあらゆる意味で損われてないと分かった地上の美や人の作品を吸収した。彼のイタリア訪問は幸運にも彼の生まれつきの性格が堰をきって出る水路を開く役目をした。夢の世界を描きたかったが、その手法がロセッティの流儀の模倣をしていたことに気付いたのである。師の異常なまでの密室的な感情の重みで人物が抑えられ、圧縮され、詰め込まれ

たような自分の下絵を顧みると、もっと自分の軽妙でもっと抒情的な精神に対して息詰りそうな情緒を感じた。彼はマンテーニャやベッリーニなどの十五世紀のイタリアの画家、なかでもポッティチェッリの作品から十分なインパクトを受け、彼の強く深い特徴を同化させることにも疑問はなく、その同質な絵画的言葉を確実に学んだ。ポッティチェッリの「春」と「ヴィーナスの誕生」で創造されていた装飾的な視覚言語に引き付けられ、それらの活力あるカリグラフィ的な線から生まれる流れるような繊細なパタンに共鳴して豊かな発想を見出したのであった。イギリスへ戻ってからは絵の主題だけでなく、自分独自の様式を発見して一段と成熟していく。

しかし彼にとって旅行は陸上であれ、海上であれ、いつでも苦手であった。規則的な時間や常食の変化によってたちまち体の具合を悪くし、客車内に閉じ込められたり、鉄道旅行に属する他のすべてを特に嫌った。プリンセプによると、この旅行で機嫌が良かったのは教会を訪れたり、絵画を見ているときで、その時の彼のエネルギーは素晴らしいが、その他ではまったく楽しいことがなかったという。彼らがパリからマルセイユに直行し、船でジェノヴァへ、それからルヴォルノを通過してピサに着いたときは、イタリア北部のロマーニャ地域の旧教皇領で法王の権力への拒否が宣言されていた。二、三日後に彼らはロセッティから紹介されていたブラウニング夫妻に会う希望を持ってフィレンツェへ向ったが、夫妻はすでにシエナに行っておられて彼らはがっかりした。後に一行が大聖堂を訪れて回っていたときに、イギリスの詩人で作家でもあったウォルター・サヴィッジ・ランドア氏と一緒に会えた。バーン＝ジョーンズはフィレンツェからこのように書いている。「私はいつも元気で、絵を沢山描きましたし、帰ったらとても教養ある人間になっているでしょう。ここの気候は晴ばれとしていて、田舎では二回目の干し草づくりをしていました。葡萄もみな熟し、薔薇もあちこちに咲いていて、いつも静かに風が吹いて丁度良い気候です。一日中

絵を描き――私たちに何よりの休息を与えてくれる――日没をいっぱい浴びています。そして夕食が終ると何もすることがなく、9時頃まで寝そべっていて眠りに就きます。私はこの旅行で得るのが沢山あり、勉強も多くしました。しかし終わってしまうと帰って仕事に戻れたら嬉しいとも感じています」⁽²⁴⁾。

ヴェネツィアから家に書いた手紙が、彼にとってのこの旅行の別の面を伝えてくれる。「私たちはついに広い世界の一番楽しい――奇妙で楽しい偉大な街道で何百倍にも美しい――場所に来たのです。けれどここにいつまでも居て、一日が終わっても立ち去りたくなくなってしまふので、さよならを言わねばならないのです。このような都市は――みな海の上に建てられていて、水のなかに家も広場もあるように感じられ、ハンソムの代りにゴンドラが何処へでも連れて行ってくれるのです。毎朝ホテルから誰かが迎えに来てくれて、公爵邸や素晴らしい教会の傍の大広場に朝食に行き――皆が朝食を野外でして、少女たちが私たちの料理に花を添えてくれ、音楽が響き、どれもがとても晴れやかですごく美しいものです。一日中私たちは水上の通りを船で滑り、宮殿や教会――百ばかりの島がみな教会や宮殿などで埋めつくされてそれらに絵画が沢山あり、ひがな一日大きな鐘がその塔から鳴り響き、夕べはいつもまた大広場の野外に座って音楽を聞き、海上の日没を眺めている内にアドリア海沿岸が夜に包まれるのです」⁽²⁵⁾。

この三人がいない内に後世に名を残す話ができ上がっていた。彼らが戻ってみると、タランチュラほどは大きくないにしろ、寝室に蜘蛛がいて、それを処理しようとしたら空中高く飛び跳ね、作戦を皆で練って手洗い桶で捕獲して窓の外に放り出すまで恐ろしい目に会わされた。放り出した後も通行人に落ちなかったかなと想像したりして、多くのことが心配になった。別の事件は税関でパスポートが調べられるときの一騒ぎであった。バーン＝ジョーンズとフォークナーの名前が退屈そうに呼び出されて、それに応答したのだが、最後に係官が当惑して見回しながらヴァレンタイン・

カメロン・プリンセプが「ヴァレンチネ・コムテッセ・プリンチペサ（偽物伯爵夫人という意味）と読まれて」呼び出され、6フィートもある若者が出て行ったので居合せた大衆の大笑いを誘ったのである。

フォークナーは秋学期が始るのでオックスフォードへ戻らねばならず、バーン＝ジョーンズとプリンセプは二週間ばかり長く滞在したので、彼とはヴェネツィアで別れねばならなかったが、二人は帰る途中にミラノに寄ることにした。ここではバーン＝ジョーンズがあまりにも帰りたい気持ちに駆られて何を見ても満たされず、すぐにも出発しようと言いき張った。持って来たお金もほぼなくなりかけていたが、バーン＝ジョーンズは送金さえ待つことに耳を貸さなかった。それで今度の旅行の段取りの役をしたプリンセプは注意してうまく行けば、イギリスへ何とか直行できると計算できたのですぐに出発することにした。もっとも事故が何も起こらないことが前提であったのに、サン・ジャン・ド・モリエヌまで来たさいに、モンズニの鉄道線がなだれで閉鎖され、三日は遅れることになってしまい、それが彼らの費用に深刻な変更を迫った。なんとか時間をまぎらさねばならなかったところで、居合せたフランス人の旅行の一行のなかの二人とプリンセプの会話がはずんでバーン＝ジョーンズはフランス語が少しも話せなかった。キュローズで再び汽車に乗り合せたフランス人が、友好の気持ちからパリまで四人でクーペ（客車後尾の個室）にした方がよいという話になった。その計画は考えてみると余分な出費であったが、プリンセプは喜んで同意してしまった。それからフランス人たちはフランス中東部のブルゴーニュ地区のディジョンに着いてフランスで最高のビュッフェ（軽食堂）で食事ができたら、汽車旅行の辛苦がとても楽しいものになると言い出した。財布がほとんど空っぽのイギリス人たちはこの熱狂に加わるのを控えねばならず、その理由を考えるのに彼らの「誇りが助けになり、プリンセプが友人と私は汽車旅行中は一杯のコーヒーとロール・パン以外は食べないことにしてい

るといふ、驚くべきことを主張したのであった⁽²⁶⁾。キュローズではフランス人が楽しめるクーペが見つかった「こっちの方がずっと快適でーしかも8フランだけ別に出せばよいのだから」と言った。それでイギリスの若者の別の誇りが実は持ち合せの金額にその余分がないことを打ち明けさせた。「問題はありませんよ。私たちが必要なら、お貸しいたします」と友人でもない人たちが親しく言って即座に5ポンドをぽんと出したので、その問題はかたずいた。しかしディジョンに着くと、新しい別の問題が生じた。イギリス人たちは獵犬のようにお腹をすかしていたのに、幾日も見たことのない夕食を眺めて「鉄道旅行中」に新しく見つけた節欲の規則によってビュッフェは禁止であった。二人は相談した結果、やはり自分たちとイギリスの名誉にかけても言ったことに忠実でなければ、ということで二人のフランス人たちが素晴らしい夕食を楽しんでいる間にも「一杯のコーヒーとロール」で痩せ我慢をした。

10月25と26日にフランス西北部のディエップからイギリスのニューヘヴンまで海峡を渡ったが、嵐に会い、7時間も船内の柵の外に放り出される始末で、バーン＝ジョーンズにはその時の船酔いの嫌悪の思い出が追憶の危険箇所になった。次の日にウエールズの沖合では同じ夜に長く吹きつけた風が人の生命を奪ったという恐ろしい報道を知って自分たちのめざした沿岸の方がましであったと、胸を撫でおろした。

この最初のイタリア旅行の後にバーン＝ジョーンズは、偉大な画家たちが偉大な時期に何を描いたかを知って、自分もその子孫であることを認識して帰って来た。ロセッティは「自分が怖くなつてはいかん」と、つまり自分にある想像力を損わないように諭した。しかし伝統を常に受け継いでいるに違いないことを間違いなくバーン＝ジョーンズは認めさせられ、以前の自分の勢い込んだ状態に失望したようであった。その旅行後に彼は熱烈な努力によって、その方針を確立し始めた。

当時バーン＝ジョーンズはその日暮しの経済状態であったので、結婚はなかなかできそうになか

った。彼は父親やプライスとクリスマスを過ごすためにバーミンガムへ行く途中の12月にマンチェスターのジョージアナの所へ立ち寄った。バーミンガムのスポン・レーンではプライスの妹が亡くなって、あまり陽気には過せなかった。しかしそこから帰りにブリストル・ロードに立寄ったさいにはもっと明るくなっていた。そこにはマドックス・ブラウンから来春にジョージアナを招待したいという提案の便りが届いていて、バーン＝ジョーンズは優しい心使いのこの招待が彼女にとっても「思いがけぬ喜びです」と返事を書いた。そのマドックス・ブラウンの招待がきっかけとなって、バーン＝ジョーンズは結婚に踏み切ることとなるのである。この二度目の訪問のさいにバーン＝ジョーンズはほぼ仕上がったインクで描いた美しい絵 — 「ブオンデルモンテの婚礼」 — をジョージアナに見せた。彼女はその絵を愛情込めて褒めたが、その後は見えない世の判定の厳しさに甘んじねばならず、安らぎも報酬もない彼の憂き世の長い日々が始まる。

バーン＝ジョーンズの非生産的なこの年を通じてプリント氏は、描かれてもいない絵画にすでに支払った代金について、心配することもなく、バーン＝ジョーンズの健康について同情するとりわけ優しい表現を書き加え、さらに内金の小切手を送り続けた。これらの簡潔な手紙文が与える彼の印象はあっさりした善意であるようだが、作品が出来上がる前に彼が他界してしまうことになったのはバーン＝ジョーンズにとって何とも心の痛むことであった。

注

1. “Memorials of Burne-Jones”, Burne-Jones, *Giorgiana*. Lund Humphries, 1993. vol. I p.159.
2. Ibid.
3. *Giorgiana*, op. cit., pp.159-160.
4. *Giorgiana*, op. cit., p.159.
5. *Giorgiana*, op. cit., pp.161-162.
6. *Giorgiana*, op. cit., p.164.
7. Ibid.
8. Ibid.
9. *Giorgiana*, op. cit., p.173.
10. Ibid.
11. *Giorgiana*, op. cit., pp.174-5.
12. *Giorgiana*, op. cit., p.178.
13. Ibid.
14. *Giorgiana*, op. cit., p.179.
15. “Burne-Jones Drawings”, Dean, Ann S. Heritage Press, 1993, p.3.
16. “Memorials of Burne-Jones”, p.188.
17. *Giorgiana*, op. cit., p.195.
18. *Giorgiana*, op. cit., p.190.
19. *Giorgiana*, op. cit., p.191.
20. Ibid.
21. *Giorgiana*, op. cit., p.192.
22. *Giorgiana*, op. cit., p.193.
23. Ibid.
24. *Giorgiana*, op. cit., pp.197-8.
25. *Giorgiana*, op. cit., p.198.
26. *Giorgiana*, op. cit., p.199.